

---

# 重奏世界蹂躪混乱記

tasogaremono

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

重奏世界蹂躪混乱記

### 【Nコード】

N2307Z

### 【作者名】

tasogaremono

### 【あらすじ】

時は、聖譜暦1648年、三河消失とともに行なわれる君主ホライゾン・アリアダストの処刑の中、とある世界の少年は悲運にも神の悪戯でこの世を去ることになった。そこで手に入れた力は指針を狂わす悪魔の兵器、そして少年は今同じ境地に立たされているものを救いに始める、そしてそれは全面戦争を意味していた。ゆえに少年は世界を相手に動き出す

\*この物語は某頭の自嘲気味でお構いなくいろいろなものをぶち込んで力オスにする作者によって作られた境界線上のホライゾンの物

語です。どうぞお構いなく白い目でお読みください。ちなみに人によって様々ですが神様チート物語です。

## 境界線上の奏者達

とある世界の学者はこう唱えた、

『この世界は沢山ある、故に楽しみ方、生き方、考え方、様々だ、だから決して忘れて欲しくない、この世界にはまだ自分も知らない可能性があるということだ、それは時に最悪をもたらし、時に最善をもたらす』と

そして、この時、少年は平凡な日々を送っていた

少女は無慈悲な研究者につかまり、モルモットとされ冷たい釜の中で実験として生きることとなった。そして、復讐を決める

そして、とある青年は古き幼馴染を助けるために立ち上がり

とある少女はその思惑で高笑いをする

またあるところでは騎士が鎖をもって立ち上がり

幼き政治家はみんなを引っ張ろうと指導していく

またあるところでは高笑いをしながら世界を手中に収めようとする  
老いた人もいる

そして、消滅した土地の中には指針にない建物が隠され、静かにその時の歯車を動かそうとしていた

様々な物語が交わる中、ひとりの少年は死を迎えた

それと同時に人々は指針の狂わされた未来へと歩き始める

## 境界線上の奏者達（後書き）

さあ、始めました、境界線上のホライゾンの二次創作、今回が私にとって3作目になります。どうか温かい目で見守っていただけると幸いです

## 始まりの二人（前書き）

始まりとは何か

配点（死について）

## 始まりの二人

聖譜歴      XXXX年10月9日

「で、ここは、おなじみの天国です」

周りは雲、辺り一帯雲

目の前にいるのは黒髪美少女天使？、はい、マジ最高です、うんマジで、まあ、これが現実世界（生きていた時の世界）だったら錯覚を起こしかねないがな

それにしても、ジャンプを買いにコンビニに向かっていたら十字路で突然やってきた4トトラックにものすごい勢いではねられてそのまま吹っ飛ばされ落っこちたのが鉄筋コンクリート打ち込んでいてまだあのでっかい釘があったところに真っ逆さまにダイブ、そしてら全身ぐさりといってね、それで一発で逝った

なんてギャグじゃないんだからやめてほしい、うん、これはマジだった

「それにしても？あの死に方うけるわ？飛ばされたのが500メートルとか、どこぞのスマブラのホームコンじゃないんだからww」

「あの、いくらなんでも人の死を笑うのやめてもらえます？」

笑うと可愛いのだが、さすがに理由が理由で少し笑えなかった

「いやあ？ごめんごめん」

まあ、別にいいんだけど、現在の状況を除けば、何故かって？そんなのかんたんだ、今状況的にともまずいからである

「それにしても、いい体してるわよね〜舐めたいわね〜」

とりあえず逃げようと思うが逃げられない、なぜなら

十字架に磔にされパンツ履いてYシャツ一枚なのであるのである、ちなみに俺は男である、もう一度いう男なのである

クンクン、天使がやけに近寄ってくる、けどかなり恥ずかしい  
「いい匂い」

そういうとYシャツのボタンを一つつつ丁寧に外していくと  
「フウ……」

妙に息が熱っぽかった

「まあ、とりあえずここで襲うのもあれだし、状況を教えるわね」  
そういうと、なにやら一枚の紙を出して見せる

「まあ、言われなくてもわかると思うけどあなたは死にました、だから閻魔様の判決がうんたらかんたら」

「（うんたらかんたらってなんだよ）」

「って言うところなんだけどね、今回はそうも行かないのよね？」  
「????」

「まあ、状況がよくわかってないようね、自分の死因でなんか違和感ない？」

「……500メートルぶっ飛ばされたこと？」

「そう、その通り、今回はね、ちよいと遊び心でね……うん、悪気はないと思ってる、反省もしてないし、後悔もしてないもん、だって神様だし」

「（後悔と反省くらいはしてくださいよ（・ー・；）しかもこの人神様だったよー！！）」

「で、流石にね、それだと最高神がね、ダメだっていうからしょうがないから他の世界に送ることにしたの」

「へえ？」

「で、行き先なんだけどね、ここに逝ってもらいます!」

「（字が違う!字が!）」



そついうと鈍器のような物を持ちだした

「境界線上のホライゾン？」

「読んだことあるでしょ？」

「ええ、はい、もちろん」

「なら、話が早い、というわけで、テンプレねテンプレ、転生よ転生」

「転生っすか！？」

「そゆこと」

「で、流石にね？そのまま行かせて死にました？なんてめんどくさいから、お姉さんと特訓だよ！」

「特訓っすか（；、、）」

「お姉さんと四六時中一緒なんだよ」

「キタ（。°。°） ツ！！」

俺のテンションはガンガン上がる

それから無名の者の特訓は始まった

それは想像を絶するものだった

「んじゃあゝまず最初はこれかなゝ！」

そついうと天使が人差し指を天に向けると、たちまちどす黒い雲と共に雷雲が現れ

ズバババツバアアアン！毎秒400発の雷が当たりに降り注ぐ

「とりあえず慣れてみよゝ！ちなみにここ死んだあとの世界だから死なないよ」

「（死んでも慣れるもんじゃねえ！）」  
そつ言いながらも

ピシャッ！バリバリバリ！

脳天に雷が直撃する

「ウワアアアア！」

ものすごい激痛が悲鳴と共に体を駆ける、とりあえず体が張り裂けるほど痛い

しかし、何かの鎖が外れたみたいに体が軽い

ちなみに、神様の力によって、超回復が施されており、瞬間的に肉体が再生するというまさかの事実、だから

「それ！それ！」

笑顔で雷を当ててくる神様、その行動に躊躇いはないとことん滅茶苦茶だった

一番ものすごかったのは

「うん〜んじゃ次コレね〜」

ちなみに雷の初期訓練が終わり、頃合を見計らってきた頃天使がそう言った

そして、俺の目の前にあるのは幅70cm位の薄い板

「というわけで、飛び降りてもらいます」

「エッ！（；。°。）」

「異論は認めないんだよ〜」

眼下には空、地上までの高さはまあ、6000m位だろう

「んでは、逝ってみよ〜」

そういうと

トンッ！

物凄い力学を無視した肩叩きにより

「うつそおおおお！」

ヒュルルルルルルル！

6000メートルからの紐なしバンジーとはまさにこのこと

めちゃくちゃなスピードで迫る地面、さすがに死なないと言っても

「これは嫌だアア！」

俺は少しでも衝撃を吸収しようとして体制を変える、それと共に近くに水面がないか空から見るが

「ねええ！」

ズシャアアア！ドゴオン！大量の砂煙とともに地面が抉れた

そのほかにも、基礎体力訓練（筋トレ各1000回×10セット／日）の他に溶岩の近くで30分耐えるとか、水中でずっと息を止めるとか、もはや無茶苦茶、そのほかにも、周囲1kmの敵の気配を察知する訓練とか、そのほかにも無茶苦茶な量を放ってくる弾丸を一発も当たらずかわす訓練とか行なった

まあ、朝昼夕と地獄の訓練をし、

夜はなぜか

「ういゝスバルゝ私の酒が飲めないのかあゝ？」

絶賛デロンデロンの神様、そして、勝手に名付けられた俺

「（これアルコール度数高いじゃん）えっ、いや、あの」

「飲めないのかゝ」

そういうと無理やり酒を飲ませてくる神様

「今日だってさあ、あの雷神ゼウスのエロジジイ、セクハラだよセクハラ」  
愚痴をこぼす神様

「それに比べてさあ」

そういうと俺の顔が神様の手によって吐息が当たるほど顔の近くにもつていかれ

「見た目可愛いし、言うこと聞いてくれるし、セクハラしないし、いいところくしょねゝ」

そういうと俺の方に倒れ込んでくる

「（おいおい、天下の神様）」

毎度おなじみのことだが酒飲み神様の相手をさせられた（色々ハプニングがあつた、ほんとに危ない意味で）

それからなんやかんやあつて数十年後

「はい、これ」

「これはなんつすか？」

どこからからか持ちだしてきたのは一本の長太刀

千子村正、もちろん武装ですせんじむらまさ

「（村正・って妖刀やん！）」

「妖刀つて思ったでしょ？、実は普通の刀でゝす」

「絶対普通じゃねえ」そう答える俺

「ということとは、もう時期ですか？」

「そゆことなのです」

「はやいものですね」

「ねえ？」

数十年の特訓でもものすごく色々なものが強化された  
肉体強化はもちろん、視力聴力共に超人レベルまで強化され、第6  
感ならぬものもついた

「たぶん、君なら使いこなせるんだよ！」

「まあ、直感で合いそうな気がしますからね」

そついうと、なにやらボタンを持ち出し

「んじゃあ、いってらっしゃい」

「はい、いきますわ」

ポチッ！

・  
・

「テンプレなんだよテンプレ！」

「先に言ってくれえええ！」

真っ逆さまにダイブし始めた

そして、これから始まる物語で重要な人物がもう一人、目覚めるのであった

「被験体、F H 0 1 s 紅蓮、体内同化率の75%が同化完了」  
おにまるくにつな

「鬼丸国綱とのシンクロ率、安定領域に突入」

そこにいるのは白髪的女性しかし、頬や体のあちらこちらに赤い痣や紋章が書かれている

「こつも同調率が高い実験体とはな、なかなか面白い」

「それにしても、まあ見つかったもんだ、とあるお家さんが継いでいた”鬼斬りと並ぶ天下五剣”ねえ・・・とんだもんがこの世界にあつたものだ」

研究社は只々、その表示枠を見て頭を回転させる  
サインフレーム

「まあ、完成までは少し掛かるがこれでも十分だろう」

研究者は言葉を並べながら、手元にある物理ディスプレイを見てた

コポコポツ！研究者気付かなかった、この時何かが動いたことを

ピキツ！40層もあるガラスケースにヒビが入る

「（私は・・・私は・・・ここから・・・）」

ガシャアアーン！ガラスのケースが音を立てて割る  
そしてその研究所は火の海に包まれた

「（私は・・・探す、これから、意味を）」  
火の海の真ん中にある人影、怪しく光る赤い瞳と痣、そして、炎の  
中に揺らめく銀色の髪と黒い服

飛ぶ紙が一枚、そこに書かれているのは松平元信の名前だった  
”人工生物進化計画” そう書かれていた

## 目覚めの戦場（前書き）

全てはなんのために動き出すのか  
配点（自分とは）

## 目覚めの戦場

ズシャアアアアアン！

「いつてえ！」

地面からぶつかる、受け身をとったもののさすがに痛い  
そして、ぶつかった衝撃で地面がえぐれる

ぶつちやけ死んでも問題なかった威力だ、まあ、そりゃ6000m  
のダイブになれたからである、そして

「ああゝ生きてるスバル？」

「ああ、生きてますよ神様」

「いやゝさっきはごめんごめん、ああゝいい忘れたんだけどそのあ  
たりに山小屋あると思うけど、その家がそっちの世界での君の家だ  
から、ちなみに設定としては親いないからゝ」

「ご丁寧にありがとうございますわ」

「いえいえゝ」

「あとゝ追加で機動殻つけといたからゝ」

「どうもゝ」

そういうと通信が切れる

「ふうゝん、まさに最高ってかんじだな」

ピキッ！頭が割れるように痛くなり

ブツンッ！電気が落ちるように俺の意識も消えた

ここは仙台伊達教導院大広間

ズドオオオオオオン！なにやら遠くで何かが落ちたまたは爆発した  
ような音が聞こえた

大広間にいるのは、女性二人



「ねえ、正宗」

「なぐに、成実？」

「なにか落ちましたわね」

片方の機動殻の女性は手元の表示枠でその落下物の周辺の地図を出す

「そうわね、しかも、領地なのかしら？」

「うん、思いつきり領地よ」

ツツコミを入れる成実

「あらあゝ」

重い腰を上げる成実

「不転百足でみてくる？」

「おねがいゝ」

正宗に言われゆつくりと腰を上げる成実

「んじゃあ、4番開けて頂戴」

「了解」

政宗は手元に表示枠を表し

「政景さん、成実がちよつと落下物の確認に出るみたいだから、4番滑走路開けてもらっていいかしら？」

『Tes.』

「あつ、副長どうかされましたか？」

「えっ？ああゝちよいと外遊つてところかしらね」

「Tes. なにかありましたら、連絡ください」

「Tes. んじゃあ、ちよつと警戒レベル上げておいてもらえない？」

「Tes. 了解しました」

そついうと足早に去っていく生徒

「（まあ、警戒するに越したことはないからね）」

そつ言いながら廊下を歩いていくと

『副長、滑走路の準備完了しました』

「Tes・ありがとね」  
『いえいえ』

そついうと少し身構えて

「不転百足！」

ジャキッ！光と紋章と術式と共に機動殻が成実の四肢に装着される  
「んじゃあ、行きますか」

パシッ！バシユウウン！ブースターが唸りを上げ一気に加速し飛び出す不転百足だった。

ギユイイイイイン！

不転百足を飛ばすこと10分

「で、どう？正宗？？」

「うん、確かに何か落ちた後はあるわ」  
周りを見てみると山岳地帯には

そして、成実を見た

「えっ、うそ・・・」

そこには中学2年生くらいの少年が、ぐったりと横になっている

「人が・・・落ちてる・・・嘘でしょ」

成実は啞然としている

それもそうだ、爆風威力的に物凄い高さからの重量落下だと考えたからである

「どうしよう・・・」

そついうと通神が開く

「正宗く人よ」

「うん、もってかえってきちゃって」

「Tes」

そういうと、不転百足を起動させ後ろに乗つける成実  
「んじゃあ、行きますか」  
そういうと不転百足を飛ばす成実

『成実！』

成実は、不転百足を飛行させながら空を見る、そこには何故かP・A・ODAの極秘戦艦  
それは前方に3つの砲門のついた4連艦、大きさは準リヴァイアサ  
ン級である

「っ！記述にない艦船・・・どういうことよ！？」

紋章は確かにP・A・Odaの奴だ

成実は不転百足の右旋回でその艦船を避けようとする  
ズドンッ！

「攻撃！？どうして！？」

『成実！大丈夫！？』

ズドンッ！ズドンッ！武神不転百足にめがけて思いつきり弾をブチ  
かます艦船

「正宗！？どういうこと？」

『よく聞いて、成実』

正宗から通信が入り、それを注意深く聞く成実

『さつき、通神で、P・A・ODAからの連絡でその艦船は、安土  
のプロトタイプらしいんだけど、それがなにものかにハイジャック  
されたみたい、で撃墜命令が出たわ』

「まったく、なにやってるのよあいつらは！？で、どうすんの？」

『私も出るわ』

「大丈夫なの！？」

『ええ、大丈夫よ』

そういうと通信が切れた

「まったく、エライことになったわね」

そして、うしろの荷物<sup>オレ</sup>を見る

「どうしようかしらね、これ」

そう注意を俺に向けてると

ズドンッ！不転百足に直撃コースで砲弾が発射された

「っ！避けなきゃ！」

急いで回避行動をとる成実、しかしコース的によけられるものではない、しかも、放ってきたのは高压砲弾、つまり即死である

「っ！来い！千子村正<sup>せんじむらまサ</sup>！」

後の俺が目覚め

ズガガガガガアアン！目覚めると同時に不転百足に即死級の攻撃が直撃するが

「えっ！無傷！？」

成実の目の前には黒い極東服姿のさっき拾った少年が全てぶった切つて、宙に浮いていた

「どうも、さっきは助けてくれて」

その少年はクルリと顔を成実の方に向け

「ありがとな」

そういった

## 戦場の破壊者（前書き）

戦場とはなにか？配点（能力）

## 戦場の破壊者

「（まったく、最悪の目覚めだぜ）」

起きて少し辺りをみてみりゃあ、艦船vs機動殻を纏った人、しかも砲弾の嵐、確実な一方な防戦だ

これほど、目覚めが最悪なものはない

「（けど、話を聞く（盗み聞き）する限り、ぶった斬っていい相手らしい）」

「（さあ、ショータイムといこうかな）」

俺はそういうと一気に空に駆け出し、この世界初でぶった切りを行なった

幸い、流体と術式展開で足場を作って一気に駆け出す かなりの無茶

「どうも、さっきは助けてくれて」

俺はクルリと顔を成実の方に向け

「ありがとな」

一呼吸おいてそういった

俺は戦艦に対して指を指して成実に聞いた

「あの艦船、破壊対象としていいんだな？」

「やけに、余裕じゃない？あなは？」

「白河スバル、無所属だ」

「へえゝまあ、どういう理由があるが知らないけど、協力してくれるの？」

「Jud.」

「応対、知ってるみたいね」

「ああ」

そりゃそうだ、原作知識はある程度入っているからである

「で、君はどうするの？私が指揮っていいかしら？」

「ああ、一回だけホント一回だけやらしてほしいことがある」  
スバルは成実に頼み込む

「要するに、少し自由にさせろって事？」

「そゆこと」

現在、空中俺は成実の後ろから話しかける

「Tes、一回だけよ？」

「それで、十分だ！」

スバルは空を蹴り上げ、艦船の目の前に出る

砲身がこちらを向いている。いつでも砲撃体勢のようだ

そして、俺は腰にある、鞘に手をかけると

赤色の光と共に鯉口に術式が展開する

少しだけ引き抜きはばきにあるリボルバーを縁にあるトリガーで回転させる

右足を前に出して加速の体勢に入ると左足のかかとに加速術式が展開され、俺は艦船に向かって一気に駆け出す

その速さが術式によって一気に増し風と同調し始めると同時に鞘の中にある刃に流体エネルギーが一気に溜り、目が本調子になり視界が一気にはれると同時にエネルギーで目が赤く光る

それが動くたびに、目の光がゆらりゆらりと揺れる

村正の威力をわかりやすく言うと流体砲撃×10倍の威力並みの高密度流体が刃先に流れる。触れるだけで戦闘艦船はおろか、地面が割れる、それが初期威力である村正

ちなみに、現在は世界干渉のため威力を自分の意思でかなり抑えている

俺は、足に展開した跳躍術式で一気に戦艦と同じ高さまで上昇し

ピカアアん！はばきのところを中心とするように攻撃術式が展開され、そのバレルが切先まで伸び

ピカンツ！術式が刃全体を包み込むと刃に流体が刃に流れる

俺は抜きを形を保ちながら艦船に向かつて

「斬り伏せる！千子村正！せんじむらまさ」

スシャアアアアン！

一気に左から右へ、遠心力を利用したものすごい速さの超速抜刀を行う

その抜刀に世界が遅くなった感じがする、いや自分が早くなったのだろっ、そう感じながら、俺は刀を艦船にたいして振るっ

カチッン！

俺は刀を鞘に戻す

俺は次の瞬間、艦船の最後尾の真下の地面に衝撃緩和術式と共に着地した

ズガアアアアン！全長3キロはある艦船が縦横まっ二つになり、爆発し、破片が飛び散る

その光景は周りから見ると紅い閃光が艦船の横を通ったと思ったらそのまま、地面に着陸した、それだけだった

そしてその破片を睨みつけるように見て

「（・・・破片か）」

俺は瞳を閉じ心を静かにする、それと同時に感覚を鋭敏化させる体から力が抜けていく、ただ、破片をそこにある存在として認識す



る、それと同時に何枚もの加速術式と攻撃術式とそれに付随する術式がスバルを中心に展開される

俺は静かに瞳を開き

シユタツ！左足で加速術式を踏むとものすごく加速する

「夜叉一刀」

超神速の抜刀により、墜落する破片をを豆腐のように断ち、破壊した

チャキツ！俺は刃を鞘にしまった

それと同時に破片が1メートル以下の破片となって地面に突き刺さる

「（・・・あれ、しでかしたか）」

なにか、やらかした感がある俺

・ ・ ・

「・・・」

後の成実が、啞然とした顔

それもそうだ、成実から見たらいまの彼の姿は夜叉そのものだった、なぜなら目から放たれていた赤い光が余計彼を夜叉たらせていたからだ

スタツ！俺が空中から地面に降りると

ズダダダダッダダ！なにやら四方八方そして上空から俺を捉える

チャキツ！

「おとなしく、って言ったらわかるかな？」

後ろにいるのは、右に角が生えた人？

「仙台伊達教導院総長兼生徒会長の伊達政宗だけど・・・一緒にこれる？」

その途端、頭が一気に痛み始める

ピキッ！割れるような痛みと共に俺は地面に倒れる、そして、俺を少し手荒に抱える成実

「（助けて・・・）」脳内に女の人の声が響いたと同時に

ドサッ！バタッ！

俺の意識は一気に切れた

## 境界線上の指導者（前書き）

そこにあるのは何か？配点（信頼できるもの）

## 境界線上の指導者

「あらあゝ倒れちゃったわね」

「どうする正宗？」

「とりあえず教導院まで運びたいから、ううん、成実ちゃん運んでくれる？」

「Tes」

そついうと行きと同じ方向に向けて飛び始めた

それから数分後

『副長 伊達成実 帰参するわ、誘導して』

不転百足は速度を落としながらいくつもの鳥居型の表示枠をくぐつていった。

その先には正宗の指示で待機していた保健委員たち  
そして、滑走路を走っていく不転百足

プシュウウウウ・・・機動殻が外れるとともに

「よつと」

成実 は地面に降りる

「お疲れ様です、副長」

「ああ、ありがとう」

駆け寄ってきた保健委員にねぎらいの言葉をかけられる成実

「ええ」と、さっき不転百足で見たけど原因が不安定らしいの、見  
てもらえる」

成実 から見れば年齢的に俺は弟みたいなもの

「Tes」

保健委員は俺にいくつかの護符を貼る

それと共に体が楽になる

それから、莫薩に運ばれる俺

「・・・どう保健委員長？」

「うん、バイタルも安定していますけど、この子どこで拾われたのですか？」

「山の中よ」

周りには様々な表示枠

「へえ？で、その前何かあったのですか？」

「艦船をね・・・」

すこし2人の間に重い空気が漂う

「まあ、知っていますけど、随分と凄い戦力をつれてきたものですね」

「入れるか入れないかは、正宗が決めるんだけどね」

「ふうん」

「まあ、とりあえず副長は戻っててよろしいですよ、総長のところに、起きたらこちらから連絡いたします」

「T e s」

そついうと戻っていく成実だった

一方、機関部では

「ええーと、これって、機動殻ですよね」

機関部の面々の前にはとてつもなく銀色で物々しいの機動殻

「ええーと、いえることはあれですね、不転百足のスペックよりのこちらのほうがまさかの約9倍で、しかも自立OS搭載型の機動殻だなんて、今の時代、サインフレームといつかいつ作られたのが気になりますね」

そついうとなにやら表示枠にいろいろ表示されてる

「しかも、こちらもちちらで、また厄介な武器ですね、今の時代じゃ珍しいカードリッジロードシステムですか」

機関部の一人がそう告げる

「しかも、彼の詳細データ見ましたけど彼の内燃<sup>イレギュラー</sup>揮気の回復もそうとう早い内部蓄積料に至っては戦艦級、もはや異常者ですね」

サイン<sup>サイン</sup>フレーム表示枠には毎秒、約最大値の10%回復、内蓄料、常人の1000倍・・・なんだろう、

「そうですね」

なにやら辛辣な表情を浮かべる二人の機関部の従者

「とりあえず、厳重保管つてところですかね？」

「そうだね」

それから数時間後

「ヤベエ、無茶すぎたかな」

俺はとりあえず起き上がる、周りには誰もいない、若干まだ体が痛い

「（ここは、まあ、運ばれたんだろうな）」

周りには畳が敷かれていたところに唯一人、俺は手元にあった緑茶を飲む

「とりあえず、動いてみるか」

そういうと俺は莫塵から出て廊下を歩き出す

「ここは、どこだ・・・？」

周りを見るとやけに古臭いといつては何だが趣のあるところだった

歩いて数分、やけに密度の濃いところにつく

「周りには人工の庭か」

ピキーンッ！また再び頭の中が痛くなる

「（とんでもすぎる）」

俺は、近くにあつた桜木の木下に座り込む

「まったく、前途多難だな」

俺はそう溜息をする

「溜息していると幸運が逃げるわよ」

「そうそう、それと勝手に抜け出しちゃダメよ？」

やや長身の細身の女性と四肢が機動殻の女性の2人が現れた  
現れるなり、木下に座っている俺のことをずっと見ていると

「あつ、さっきはどうも」

「いえいえ」

少し微笑む機動殻の女性

「ええ」と、名前は白河スバルでいいのかしら？」

「うん？ああ」

「それで、なんだけど」

そういうと俺の背後に回る成実

「申し訳ないんだけど・・・之についてはどう説明するか、教えて  
くれないかしら？」

そこに映し出されるのは俺専用の機動殻

「・・・なぜ？」

「いやねえ、ちよつといじらせてもらったらこんなもんが出てきた  
のよねえ・・・」

俺は敵意を感じ鞘を抜こうとするが

「（・・・ない！）」

そこにあるはずの村正が見当たらない

「ああ、そうそう、こんなもんもあつたかしらねえ？」

嫌な笑みを浮かべながら表示枠にそれを表示させる成実  
サインフレーム

そして、方角の生えた女の人と言った

「聖連のデータベースによると、この武装は準神格武装 千子村正、  
二つ名を妖刀村正・・・その伝説は研いていると裂手（刀身を握る  
ための布）がザクザク斬れる、研いでいる最中、他の刀だと斬れて  
血がでてから気がつくが、村正の場合、ピリツとした他にはない痛

みが走る、そのほかにも、松平家に不吉をもたらした刀、その能力は、触れているものを全て切断する、まあ、物体だけでしょうけどね」

「（・・・物体だけ・・・ねえ）」

俺は少し口元が緩まった



## 境界線上の指導者（後書き）

ここまで読んでいただいて本当にありがとうございます。  
感想をくださると執筆の励みとなります。それでは。

## 線上の一人

「それにしても、聖連の出生データバンクにないなんて、この子、実験動物かしらね？」

「うーん、その可能性はあるわね」

「清武田のやつてるFh計画の子かしら？」

「Fhの証である頬に赤いあざが入ってないじゃない」

「まあ、そうね」

「（Fh計画・・・）」

ここに来てまさかの情報が手に入った、これは聖譜記述にないことだ

「それにしても、なんか違和感あるのよね、この子」

「うーん・・・何かしらね」

ピキーツ・・・！ものすごいレベルで頭の中が痛くなる、それと同時に一瞬だけ視界がブラックアウトすると

ピカッ！一瞬だけ見えたのは艦船がこちらに向かっていること

「（襲撃・・・？）」

さつき、見た資料とおりなら、今頃警戒レベルが引き上げられているだろうが、その警戒レベルは引き上げられてない  
通常警戒レベルだ。

「（どうしてだ・・・まさか、ステルス、けど、ステルスレーダーがあるはずだよ・・・、まあ、念のため）」

そう思って、急いで成実に伝えようとした時

ズドンッ！仙台城に轟音が響いた

『総長！副長！清武田の艦隊がせめて来ました！』  
サインフレーム

表示枠の向こう側の女性があわただしく現状を告げる

「警戒レベル通常でしょ！なにやってるのよ！」

『申し訳ありません、砲撃してきたのは清武田軍の新型ステルス航空艦隊です』

「まさか、レーダーに映らなかったっていうの！？」

『そうかと思われます』

「っ！せっかくイチヤイチャしてたときに！」

普段絶対、成実がいわなそうな言葉だ

慌てふためく教導院の中

そして、見張っていた二人が消える

「（ちよいとばかり、まあ、問題ないだろう・・・）」

そういいながら拘束具をはずす、割合、そこまで大変ではなかった

「（まあ、生前の拘束よりかわ、安いものだな）」

そう思いながら、俺は一人気配を消して廊下を歩く

そこから右往左往と人にさりげなく頼んで機関部の部屋に着いた

「・・・」

目の前にあるのは、村正

「（まあ、確かに妖刀だけってのは、ありそうだ・・・）」

目の前にたたずむ刀はただならぬものを発していた

「（物体を斬るかぁ・・・）」

さっきの成実の言葉が脳内に響く

「（さて、次は何を斬ろうかな・・・？）」

徐々に侵食されていくのであった

その途中

prrrr! prrr! 通神が入る

「(Sound Only? 誰だ?)」

俺は表示枠を表示させてでる

「もしもし?」

『ああゝスバルちゃん聞こえるかな?』

「(この声って・・・神様?)」

『おい』

「ああ、聞こえてますよ」

『そりゃよかった、ええゝと、私は誰でしょう?』

「神様だろ?」

『せいかりい、で本題に入るけどこっちのミスで千子村正を制限つきで渡しちゃったわけよ』

「おいー!」突っ込むしかない状況、

制限つきであんな威力なんて問題しかないこの状況

『まあ、思いつきりつつこんできたけどツツコンでいないこととして、まあ、言っちゃうけど、解除しておいたから、まあ、使い方は慣れていると思うし』

まあ、そりゃ慣れているわな、としかいえない

「どうすれば完全駆動できるんですか?」

『それは自分で考えなさい』

「(神の試練・・・ってやつか面白いぜ)」

『んじゃあ、頑張つてね』

「りょかい」

そういうと通神がきれた

「完全駆動ねえ・・・」

俺は腰に帯刀してある村正を見る、確かに制限と前では何かが違うということがその刀のオーラのようなものを通して分かる

「（妖気増えたんじゃない？）  
そう思うのであった

それから廊下を歩いていると

ヒュウウウウー

冷たい風が体に当たり少し痛い感覚もするが奥から吹いているのが分かった

「（つてこたあ、そこから外にいけるのかな・・・？）」

そういいながらそこまでいくと案の定あるのは、ガラスの窓  
そこから外に出れないかというのを見ると

「・・・まあ、そうなるわな」

約10メートルはある高さ

どうどうと入り口から出ればたぶん警備の人間に捕まるだろう、それにならぶくなら面倒なことは避けたい

「そうだな・・・いくしかねえよな」

俺は決心してそこから飛び降りた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2307z/>

---

重奏世界蹂躪混乱記

2011年12月17日20時47分発行